La Vita Latina

エスクァイア日本版8月号臨時増刊［ラ・ヴィータ・ラティーナ］

Giovanni Levanti

ジョヴァンニ・レーヴァンティ

今回語っていただいた建築家・デザイナーのうち3名は北イタリア出身、1名はさらに北上してドイツ出身である。デザイナー名鑑をひもといても、南イタリア出身者は極めて少ない。

ジョヴァンニ・レーヴァンティはシチリアはパレルモ出身。大学卒業後、ドムス・アカデミーで学ぶためパレルモからミラノに移住。'90年からフリーとしての活動を開始し、家具、照明器具を中心に、ふとした発想の転換のある作品を発表してきた。彼の作品は、可能な限りシンプルな構造を持ち、軽やかで、モノに対する感応力を呼び覚ますポエジーを湛えている。

出世作"XITO キシート"('99年、カンペッジ)は、床に直接置くクッションともカーペットとも定義できない柔軟な家具。その上で何をしてもいい。ここは、ものごとが生起する場所なのだ。これが、ヨーロッパの踏襲的な家具のカテゴリーにあてはまらない、革新的なプロジェクトとして世界のメディアを沸かせたことは記憶に新しい。

デザインのクオリティは人生のクオリティ。

ミラノらしいモダンなパラッツォの一室にあるレーヴァンティのスタジオはシンプルさを極めている。ここまでモノが整理されているスタジオは珍しい。彼は紙と鉛筆さえあれば、何の問題もなくデザインが出来そうだった。

「僕にとってのデザインとは、仕事というより、本を読んだり食事をしたりといった日常の活動の一つです。生きるための仕事としてデザインしているのでも、社会的成功やビジネスを目的としているのでもなく、デザインのクオリティ、さらに人生のクオリティを獲得するために活動しているのだと思います。それが結果的にビジネスになればいいわけです(笑)」 こう語る彼に戦略的なところは微塵もない。

だから、「どうやってデザインでお金を稼げばいいんでしょう?」

彼が講義をするデザイン学校の生徒から、こう訊かれた時は困ったと言う。しかし、デザインにいくらクオリティがあっても、メーカーにディストリビューション能力がなければ生きられないことは確かである。デザインに限らず映画や音楽、どの世界でも起こり得ることだ。

デザイン・スクールが存在しなかったイタリアに学校が幾つもでき、デザイナーの卵たちが毎年輩出されている。メーカーには毎日沢山のデザイン画のファックスが届く時代だ。彼のスタジオに話を聞きにやってきた22歳の青年が、デザインのビジョンとして「カッペッリーニ」の持つブランドイメージしか想定してないことに驚いたこともあるそうだ。「カッペッリーニ」は、ここ数年で急速に進められたデザインのファッション化を代表する、多くの若手にとって、いま最もクールなブランドだ。2年前までデザイン界を席巻していたミニマリズムを通過して、デザインはファッションにより近づき始めたのだ。

でも、レーヴァンティは我が道をゆく。家具のディストリビューションの問題や、表層的なミニマリズムがあったことも、デザインのファッション化が進んでいることも知っているのだが、そこからは一定の距離を置いて自分の場所を確保している。

批判精神と宿命論、そしてシチリアのおおらかさ。

彼のこうした在り方は、多くのミラネーゼのデザイナーたちと違う、と自分でも感じるのだろうか?

「そうですね。彼らよりもっと自由だと思います。外的な状況に左右されて、こうしなくてはいけない、と考えることがあまりないんです。

自分にとっての地中海をよく考えます。場所はシチリアの北の地平線を見晴らす海岸。隔離された島。シチリアは幾つもの他民族に支配されてきた歴史があります。だから、支配者にすぐに食いついてはいけない、とでもいうのか、距離を持って批判的に眺める態度が伝統に脈々と続いているんです。いま、デザイン界を支配するファッション化に対する不信感も、こうした態度と無関係ではないでしょうね」

批判的なデザイン(デザイン・クリティコ)。例えば、インダストリー側が言うことに頷かず、対抗しながらディスカッションしていく姿勢。大企業となら勝ち目はないが、イタリアの小さな企業とならやり合う価値がある。これは、イタリアンデザイン全体を特徴づける要因だ。ではシチリアで、その傾向が一層強いかというと少し違う。異なったアプローチの仕方がある。彼らは対抗すると同時に枠組みの外に身を置いて、遠くから眺めるような態度に出るのだ。

「シチリアの、もう一つのラテン的な振る舞いは、宿命論者的に待つこと(アッテーザ)です。どう状況が変わるか、見てみようじゃないかと(笑)」

彼が「完璧さ、ソリッドさ、メカニックなデザインには興味がない」と語るのも、こうした振る舞いのひとつなのだろうか。シチリア特有のかたち、色彩、自然に共通するおおらかさは、今までになかった勇気あるプロジェクト、人間味あるデザインを生み始めている。

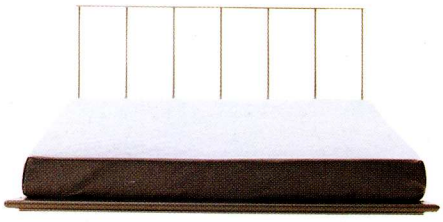
ラテン的な方法でなら、彼が理想とする「人生の速度を加速せずに、社会を変化させること」が可能となるのかも知れない。

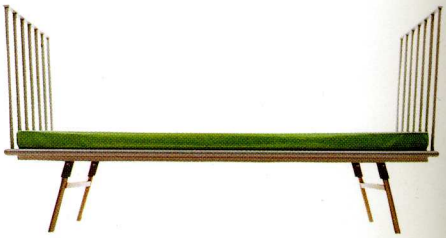
Giovanni Levanti
[ジョヴァンニ・レーヴァンティ]

1956年パレルモ生まれ。'83年パレルモ大学建築学科卒業後、ドムスアカデミーで学ぶ。卒業制作のテーマは「家の中における照明の在り方」。アンドレア・ブランツィのスタジオを経て、'90年にフリーとしての活動を開始。カッシーナ、フォスカリーニ、などの仕事をしている彼の作品はイタリアをはじめ、スペイン、パリ、日本など多くの展示会で紹介されている。また、ドムスアカデミーで講師を務めたこともある。

完璧さ、ソリッドさ、メカニックなデザインには興味がない。

Xito Campeggi 1999
リクライニング調整、全倒しも可能。ユーザーの様々な目的に対応できる新しいコンセプト家具。210×135cm。





Lovecage Pallucco Italia 2000
ベッドの高低、また背の有無などを、一つのベッドで調節できればと思ったことは? Lovecageが解決します。